

日本遺産「日本国創成のとき—飛鳥を翔けた女性たち—」

明日香村は、文化財と歴史的環境が非常に手厚く保護されている点で、全国的に特別な地域だ。文化財保護法（1950年）に基づく史跡や国宝・重要文化財の指定に加え、いわゆる古都保存法（1966年）と明日香村特別措置法（1980年）により、村域全体が歴史的風土特別保存地区として開発が厳しく規制され、田園風景の中に寺社や古墳などの遺跡が点在する独特の景観が維持されてきた。

一方、1970年の閣議決定に基づいて、住民生活の向上、環境整備の一環として、飛鳥国営公園の整備事業が開始され、祝戸地区（1974年）、石舞台地区（1976年）、高松塚地区（1990年）、甘樫丘地区（1994年）、キトラ古墳周辺地区（2016年）が開園した。また、2006年、明日香村は、桜井市・橿原市とともに、世界遺産の暫定リストの候補として名乗りをあげ、翌年、正式にユネスコの暫定リストに記載された。さらに、文化庁が推進する新たな施策、歴史文化基本構想の策定支援（2007年～）、日本遺産魅力発信事業（2014年～）などに対しても、明日香村は積極的に取り組んでいる。

なかでも「日本遺産」は、文化財保護法で指定された有形・無形の文化財群を軸にストーリーを組み立て、市町村が国に申請するもので、2020年までに100件ほどを認定する予定という。初年度の2015年の公募には全国から83件の応募があり、18件が認定されたが、明日香村が橿原市・高取町と連名で申請した「日本国創成のとき—飛鳥を翔けた女性たち」も認定18件の中に含まれた。日本遺産の認定はさっそく大きく報道されるとともに、公式サイトなど、大々的に広報活動が繰り広げられている。

史跡「飛鳥宮跡」の整備構想

明日香村による日本遺産のストーリーでは、日本が「国家」として歩みを始めた飛鳥時代に、天皇の半数は女性だったとして、女性が力強く活躍した痕跡が色濃く残る地であることを強調し、今後、これらの女性のストーリーを地域振興・観光振興に活用する事業を展開するという。明日香村によるポータルサイトでは、「コミユカ高い系女子」推古女帝、「物怖じしない系女子」斉明女帝、「先読み鋭い系女子」持統天皇などとして、ドラマ仕立てで、キャラクター像が造形されている。

その女帝たちが活躍した飛鳥の地には、その「活躍」の痕跡が確かに遺跡に刻み込まれている。592年、推古天皇が即位した豊浦宮跡は、甘樫丘の北側にあり、豊浦寺跡の下層で発見された掘立柱建物跡がその痕跡と見られている。その場所は、蘇我氏が造営した日本最古の寺院、飛鳥寺に近接し、推古天皇と蘇我氏の密接な政治的関係を示していると理解されている。588年（崇峻元年）、百濟から僧、技術者、仏舍利がもたらされ、「初めて法興寺を作る」と『日本書紀』に記される飛鳥寺の発掘調査（1956～57年）では、百濟や高句麗に系譜を辿れる一塔三金堂式の伽藍配置が明らかになった。

豊浦寺と飛鳥寺の間にある甘樫丘は、「上の宮門（うえのみかど）」「谷の宮門（はざまのみかど）」と呼ばれた蘇我蝦夷・

入鹿父子の邸宅があったとされている。丘陵の麓、「甘樫丘東麓遺跡」の発掘調査では、7世紀中頃の焼けた壁土や炭化した木材などが出土し、蘇我一族が滅亡した乙巳の変（645年）との関連が指摘されている。甘樫丘と飛鳥寺、その東側の酒船石のある丘陵に挟まれた小さな空間こそ、飛鳥時代、すなわち7世紀における政治の中心となった場所で、水田の地下に宮跡などの重要遺跡が眠っている。水田の一角には、発掘調査で発見された石敷や建物跡などの遺構が地表に還元され、1972年、「飛鳥板蓋宮跡」として史跡に指定された。ところがその後、この一帯では、「飛鳥京跡」として、橿原考古学研究所によって継続的な発掘調査が進められ、3時期の建築遺構が重なっていることが確認され、「正殿」跡を含め、各時期の建物配置も少しずつ明らかになってきた。

最初のI期は、建物の配置がまだ方位に沿っておらず、舒明天皇の飛鳥岡本宮と想定されている。642年に即位した皇極天皇が、翌643年、小墾田宮から遷った板蓋宮と見られるのは、II期の建物跡で、645年、中大兄皇子と中臣鎌足による蘇我入鹿殺害のクーデターの舞台となったまさにその場所だ。この乙巳の変の後、皇極天皇は退位し、次の孝徳天皇が難波長柄豊崎宮に宮を遷し、翌646年（大化2年）、改新の詔を宣したとされるが、その8年後、天皇の崩御に伴い、皇極天皇が斉明天皇として板蓋宮で再び即位する。しかし板蓋宮は火災に遭い、新しく造営を行ったのが後飛鳥岡本宮が、III期遺構だと考えられている。III-B期の建築遺構は、壬申の乱後に即位した天武天皇の飛鳥浄御宮と見て間違いないと思われる。

このような発掘調査の成果により、7世紀代に女性を含む複数の天皇の宮が営まれたと想定されるところから、2014年には、明日香村が「飛鳥宮跡保存活用構想検討報告書」をまとめ、文化財などの保存活用を基礎としたむらづくりを目的とする「明日香まるごと博物館」の一環として、史跡指定範囲の拡大や整備の構想を打ち出した。さらに、2016年、史跡の名称も、「板蓋宮跡」から総称的な「飛鳥宮跡」へと変更され、2018年3月、奈良県も、明日香村の構想と連動する形で、「飛鳥宮跡活用基本構想」を別に策定し、遺構の明示、建物の還元、ガイダンス施設の設置などの施策を展開する方針を打ち出した。こうした構想のもと、現在は田畑が広がるこの区域も、将来的には、平城宮跡や藤原宮跡と近い形で、面的な保存と整備が進み、飛鳥の懐かしい景観も様変わりすることになりそうだ。



国史跡「飛鳥宮跡」を見学する